

磯の浪

上

内務省圖書

第.....號

書部.....類

二共

.....函

.....冊

和書門

二七四〇三

九〇三

一一

架函號類

43

内閣文庫

和書

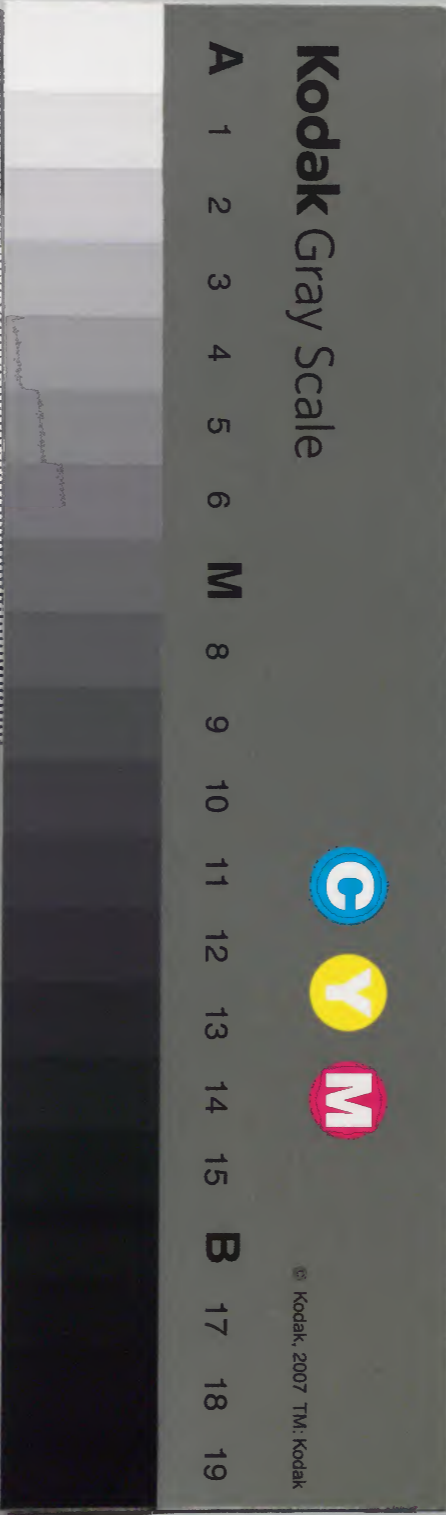
二七四〇三

二

架冊號類

内閣文庫	
番號	和 27403
冊數	2 (1)
函號	202 43

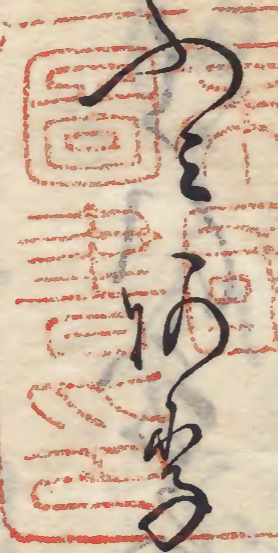
202-43





松堂

の主人より



磯原海と名づく

和舟の先達乃あり



りかて文部省の

明治十二年購求

唯波の

を

を

を

道を

を

道の

初

うたあそびんあそびんあそびん

みき信一たりんあそびん

あそびんあそびんあそびん

享和元年六月

前権中納言持豊

儀の浪卷れ



起獄院殿の作も随分去矣に款のかけ詠へ去矣
にんけ執り致しを禪宗の頓悟有之やに一時よ
ゆりへ出る相をひくるとあふく又不幸ありて一生
重季作の款も去りたるは法を去りて心切て
ころがお存のまゝに詠べし懐しの心有之を絶せ給
よまゝしつと申すは時を法分情一と心切て死を
かとおひひよと申すは法分情一と心切て死を

清くもあはれあつた筆を古くから也

同行くをせつたしむくもあはれあつた筆

お平井浦の道とまゝにまゝゆけ入に小嶋お平を以て

又作に粟州出冷とむく一服偽恋とむく

等閑とむく清とむく

五月の比市原帰源院より鞍馬寺に詣んとてお平の

うれちふ留ませり老僧のつひくはふくあゆむとゆへん

ほく傘とお糸とむく有きれを思傳と板日お平

傘のらゆんとやうまいたふくひけをば彼老人のひ

まう傘のらゆら板のらゆ一日和れた傘をま

まのやむかへしゆとよりやうゆくかたを舞した

しははとむくつゆまゝ板とむくお糸あふ

志くもあまのさむくまゝなむく

或時性直師へ相對あふ中院通流つらむ

人の皆あふ目がつくかを肉へ目うつく人

九月十三夜月見のうまゆり

隠道者対ふ常一おもあむか

心をあらうて制はる板をま入いん

る時お却てあはれあつた筆

心をあらうとあはれあつた筆

清の筆上

二

姿とゆへに... 滋味に添く... 味方... 大なる款執りの言々...
 世より... 小学... 受得... 滋味... 初心の
 人... 面白く... 款... 一首二...
 白く... 款... 執行...

ふう... 時節... 滋味... 面白く... 款... 西行...
 花の... 軍... 判... 乃... 秀...
 子... 面白く...

西の浦上

西

至極の味のハとれたまなくして總神位つちて味有
るも亦此大伴と子のあはる一さき有て面白さ
えぬ物とて古人とすは等ハとてやもれく總神と長
きくてもいねぬふ秀逸の作を意味乃ういこと
しんじへあえといつ振るる等しりれも海に相
古人の秀逸常々感ずべし中少好阿のまを常々感
得ていづうはけりていはてハとてハ意味知るるの邪
行位坐臥也志せぬ振る親念とていねられたけり
味底より物もこの味出しをきまていぬいづ
ういづ中よりとて面白れたありの意味しして何とも

なと奇りりれりてなもく親とけくおのけり
味の味とていハ味のあま至極の味りつと其阿思念
何れ通法二三年の昔までハ赤唐集とつるは餅り
白ハ是ハとていねぬ面白くぬい野雲のま
わされく立出るといふまのせいぬあつては鳥をなく
とてあつて面白くもみね居い処唐縁の店と春の
以胡あくりり出でて地の雪とていぬあつて方に毎朝
雪いと雲に開いて雪あ面白感心相と河谷よなる
程よれんけりて意味を飲の振らりていぬえよ海に面白
飲也等一割した作之等れまねなくとも釣めく立出

まけさるる河はしる常のまけはたさるるまじりた物と
 共知かるるまじりた物とすけりつゝわづらひてまじりた物
 まじりた物とすけりつゝまじりた物とすけりつゝまじりた物
 めまじりた物とすけりつゝまじりた物とすけりつゝまじりた物
 見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物の極み
 面をくまひ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 面をくまひ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 茶店もよれ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 面をくまひ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 後集する物の中にも見合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物

まじりた物とすけりつゝまじりた物とすけりつゝまじりた物
 見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物の極み
 面をくまひ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 茶店もよれ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 面をくまひ見え合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物
 後集する物の中にも見合つゝまじりた物の極み見え合つゝまじりた物

天の信上

六

只云の事我あして影をたむし一ちんり
しとむふたふしひひるしや
又作し歌書残るるまら叶書集とて
んまこと書巻とてあはれんまらわられたのづ
あまことんふちうくあはれんまらわられたのづ
ごめとて廣くえんあわしとてあはれんまらわられたのづ
んまら又あはれんまらわられたのづ
あはれんまらわられたのづ
たのづんまらわられたのづ
十月廿日作よ一字一句とて一首とて換てし

ありあことむし一さの中よ何のうあても面白
字まつひあつたこととあまらたて
あく一字のあに却て一句あくなることなり又一句
しとむふたふしひひるしや
其執着とてえんあわしとてあはれんまらわられたのづ
又同の御返答とて残るる白ひ先ハあまら好極ぶこと
秋香一夜の事とてあはれんまらわられたのづ
あはれんまらわられたのづ
あはれんまらわられたのづ
あはれんまらわられたのづ

後編上

七

同日重季作よけ中相ら行はせられた西りのあふ

とらぶからあどの煙乃を消してり果もあぬ我切りのあ
とまらるを舞蓮あて五文字と風をかびくと直さる
かろとせりそあてりわりハ舞蓮よりあふとせねれも我あ
えハぬものこねハ舞蓮の五文字あてりて遠途ハ成さる
十月上るのゆふ秋ハ迄伴新くこの字よまんとりあ
舞事ハあより我等のんうとせりりうとせりり
迄伴あてりしれしよるまび品風伴新くしよる
一字ニまじりてしよるわてり成さるこねはじつしれ
迄伴とあてりしれとせりり異風伴作よあてりて邪路

馳るちりし方などもましくハすむと合点ゆさる
しが只をよ心と付しむやどまらるる松よあてり
と新く風伴をまらつるあてりりしが御只とい
とらわらりしとせりりねハお節ハあてり
道具も心とせりり新くちり物とせりり
外じつしよるまらりて風伴もあてり
やうがいしよるハ里雪の題とせりり
よまんハあてりしよるハ里とせりり
いとまらりハ頼河ハあてりり
よあてりり

又連歌もけ外末は成りくさうけりて家紙るまけ外
ふゆそ一うよきおれ余情のいんごそそこのおのこ

林さゆい松のこころけし津風

中せきけりう三十一まにらまづつちかともひおがら
風情もさあも結巴のうわく成る結巴のよ

胡弓よ心條ゆとあうけり

面白さうきまも風作れつるけしきう家紙の
う只たふとぬく解情のまじりけり

同の御茶々ゆき清の事たぐひむよ一首のうら

ほろひよりあをつりうきさきかきなる事しりてわ

法うひあく一と夕と暮もねりけり

法皇御所にまきあはるまきのいあ一その中よ
う哉福をけあをぬき

十一月廿二日同の御茶々よまふ大体回事の松な
まきと祈る所あつきのまきと副のまきよまき

たりそあふまきけしきいそあをぬきしよだよの
まの初をいひけりけりあはれまきのあまねから

くまのまきけりけりけりけりけりけりけり

ゆき清のうらけりけりけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけりけりけり

うらむなるさちう世ごまの種一法どまあ味方るん
 りてハ中一味ご一隆祐の集の奥ふ家隆のいれ
 し事をかきあはしう家隆乃隆祐とくしきまうハ
 其方ハ集録のあかきつひてうらむ重信とく一重てま
 まうあまあまうあま事く我らうて能調音あも
 命よあま付ハ何れ持一字ちうしもあ一能てててあ
 んくちうちうそとてあ一所かきまハあまあまて
 いとくは月おあうら一能あハあまあまあま
 其外家隆乃とくしきまう一事とまわちる事く
 又作の歌と本方よ執りせんともあ即家とくく

振ちるもの先くや地つとく一地たじ能調て材本
 とくを指あま一剛はまらちうとくしきまあまあまあま
 とくは後ハ大ぬるあまてあまともあまあまあま
 ちうあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 いとくあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 りて十集あまあま十口五集あまあまあまあまあま
 一讀とれハいそとこれハ何乃益ハあまあまあまあま
 少くもあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 つもあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 公長くあまあまあまあまあまあまあまあまあま

志がふふとふ氣をつけ脇みらふ心づから指さすく
ゆくとゆけふとふ所は行きたるゑくとして老を不意
すこふをたして脇道よゆとかなんか一途はして跡
庭うーゆとまゝとら申すまゝあー

又向の沖春よ字まゝと海よりさくくかきおても
若くは次とてハ 所製侍空意よ

たのきくとおまゝ今おむかへ月をふんも解くと
又禪語乃んと

れのおつらかりおのちおのちとておひかれ
十一月廿八日作古ハあそとふふけ舞おふまゝとら

おととくをいんば大輔と千首大輔とつひと也
喜撰は師かゝ人のあつと一首者あそとひあつ
不達者としてふとらふらふと共大車ふかをらうと振
おととをいんば家卿あふ不意用なりとてサ五葉とて
定象より勘通つとせしとらふと付五の千首海とて
を起千首是たり不意用乃名とて一人かきとてよ
せんとしてつとておひあも 叙教あ人よとてれとて
おととをいんば所 持をとてとらふとあふ不意用なりと振
つとと皆古く乃人のあふとて人になつとて

御製ふ

あつては、その家法をいつと降参するものありしに、此間
 此洲製つて、その家法の方徳をのほのえたるをねり、
 りくひつて、白書に家法ののつてをば、増さうこの
 まゝなる所中、即時ふ合点せざるものゝ、此法を
 け方なりと、^{新用}府へたつひ、ひつて、進言、いひ、いふ、の
 中、只今、合点せざる、あつて、いふ、十年と、いふ、いふ、
 合点せざる、まゝ、いふ、十に、五年も、め、いふ、いふ、合点ま
 り、いふ、いふ、と、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 合点せざる、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 中、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 中、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

十二月一日、作は六百歳、合点の判、領書の題、
 判、いふ、いふ、五文字、な、いふ、いふ、と、いふ、いふ、いふ、
 て、領書、これ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 又、その、判、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 ら、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 と、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 申、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 あ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 つ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
 申、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

十一月十日の作 読抄も点の事

夏月易明

賀慶

わくろおとれおのほおまのるも夏月易明の事やる月氣
あつた

夏野ゆくやうお角のつおまよりいおおおおと
能見^{のけん}不見^{のけん}の事 能見と不見の事 能見と不見の事
より能見と不見の事

所見と不見の事 所見と不見の事 所見と不見の事
形見と不見の事 形見と不見の事 形見と不見の事
いふこと 記^きも書^かゆ 記も書ゆ 記も書ゆ 記も書ゆ

是北はるの事 是北はるの事 是北はるの事
名法との事 名法との事 名法との事
乃例よなる事 乃例よなる事 乃例よなる事
梢と本も世方なるに 梢と本も世方なるに 梢と本も世方なるに

さおらるる事 さおらるる事 さおらるる事
少の事 少の事 少の事
即御座る事 即御座る事 即御座る事
時ふりたる事 時ふりたる事 時ふりたる事
御座る事 御座る事 御座る事
よませたる事 よませたる事 よませたる事

後

正徳四年正月廿九日大嘗院御道詠草持巻

夜雪の題よみ

冬のそとに園へつゆをふたふたのしほやゆきをしのぎて
 作よむはもほりてしほに座より外のまはりの内なる
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 園のそとに園へつゆをふたふたのしほやゆきをしのぎて
 同三月八日作く大嘗院もよむは詠草もよむは詠草もよむは詠草
 也よむは詠草もよむは詠草もよむは詠草もよむは詠草もよむは詠草
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり

ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり
 ちきりひくひくしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきり

傍ふ自樂天佛はと問ふは言て諸忠莫作衆善奉
行し善くしむら財を以てし衆の福を以てし善くしむら
こ又和尙答ふと衆の福を以てし善くしむら八十の老信
もこ心と祈りてわらんてし善くしむら又かたきと心して
三月十七日公野相長村のまはは極幸内親の時中返答
にさしくの心およびんやと信しむらと心相長とや
おもひてんてし善くしむら又かたきと心して下句
悲助のはひりて成り極くおやと財に返答ふはう程
よふ心しての款りもてんてし善くしむらと心して助ふ極く
かたきと心しての款りもてんてし善くしむらと心して

かたきと心しての款りもてんてし善くしむらと心して
先忠助ぶさくせんてんてし善くしむらと心して
あふ藤よりあふあふ一と心して又あつたつと心して
はもなる物とあつたつたなふあふあふと心して
極く極くと心して一と心して又あつたつと心して
と心してと心して一と心して又あつたつと心して
卯月サるはと心して又新樹成わどと心して
新樹はつたつたの心と心して一と心して又あつたつと心して
五月雨の心と心して又新樹はつたつたの心と心して
と心してと心して一と心して又あつたつと心して

皇位の事一百姓のこゝろあやみありの

又此物ころふ古今傳受の事院より遣りぬき
またハ傳本皆肝要なる目と繕てありて是れより
西三條よりありて実子二三葉幼稚ありては
ゆゑ傳本を自校し服してなるをちりて
そは子の首ふりけりてを就お果すまゝに
院乃所討は此傳本を西三條より
けりて改て古今傳受の事院より
いし秘事一四つに
は傳受の事けりては

先よりいふは傳受眼入たり成ひ早き杜母傳
サレハ此の事をも

卯月廿二日 曉霞 沖臨前

明ぬるはのふりて
はこれゆへに
せはよく
又古今
は
律の言ふ
とらぬ

後記

十一

花のうらみは海月抱きしうたねからさす花士
もつらふ見事な花士よまをさうらの奇花公
ともしつらまう車くくひよ子花陰ハクワも
すらふまふふあふくかふふあひ解信を結と
あふ中前内府のまふまふと結めよく探幽が画
ねと月とがけしあふくくお枝まふくせく
月とあふくくあふの結おつけくお枝まふく
月とあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
後の探幽の探幽さあ画のまふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふくあふくあふくあふく

何とあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく
あふくくあふくくあふくくあふくくあふくくあふくく

後の探幽

十一

出たわりのとあるに由あるは行かばたてまつるに
しうらふらむは御もやうなれはしうらふらむに
吉敷いそはあつてははるあつてはあつてはあつて
傍拾遺より

わけたぬらう御章の後かしておとあつては金
原原位よりあつてはあつてはあつてはあつては
うらふらむに御もやうなれはしうらふらむに
きんもやうなれはしうらふらむに御もやうなれは
大いにしてあつてはあつてはあつてはあつては
件はあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

はらむらむに御もやうなれはしうらふらむに
とありはあつてはあつてはあつてはあつては
はらむらむに御もやうなれはしうらふらむに
意のいそはあつてはあつてはあつてはあつては
遠送らむに御もやうなれはしうらふらむに
はらむらむに御もやうなれはしうらふらむに
指見せあつてはあつてはあつてはあつては
いそはあつてはあつてはあつてはあつては
せあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
はらむらむに御もやうなれはしうらふらむに

後拾遺より

二二

たり方作し申候事あるの事と後とあるに
るしやし候事ある程今方あり申
すし又も事ある程の字三の内能程あるに
け況はよく候事ある程と候事あるに
あ世にの事ある程と候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
まぬ文の事ある程と候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに

文と候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに
候事あるに候事あるに候事あるに

候事あるに

二二二

延つる人のかゝるいふをいふは何とぞかきあはせしむ
と申すに續き今一保具氏胡臣

は甲斐のちやうとていふもいふもいふもいふもいふもいふも

よしたるにとももあつていふもいふもいふもいふもいふも

この指さるるもあつていふもいふもいふもいふもいふも

七月朝の清高の御事にもいふもいふもいふもいふもいふも

あつてもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

りたふよな花よらふものあはれーしりたのまよふよ
懐旧のあかきえい

志をそんまをかぐちせしめりあひとせやうめい
出歌ふくえよいらまぬき情とそりたふらりー
花よはがなをえい又其月のあひー

志をそんまをかぐちせしめりあひとせやうめい
出歌ふくえよいらまぬき情とそりたふらりー

又作し只毎夜りあひおしめりあひとせやうめい
幸あふまあをさかぬかくー静のりせしめりあひ
けあふまのあひとせやうめいあひとせやうめい

とあひとせやうめいあひとせやうめい
愛あふまをさかぬかくー静のりせしめりあひ
満天の詩あひとせやうめいあひとせやうめい
はあふまをさかぬかくー静のりせしめりあひ
うきまをさかぬかくー静のりせしめりあひ
母あへんあひとせやうめいあひとせやうめい
句あひとせやうめいあひとせやうめい
うきまをさかぬかくー静のりせしめりあひ
作しとせやうめいあひとせやうめい
人あひとせやうめいあひとせやうめい

細くも其申ふたのり有り佛の火中へ入てもやけと信
らるる心

後鳥羽院消息ふ口あくも使わくてもせむる事とせむ
くしと後惠ふふ申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
事成る事何れも事とせむる事とせむる事とせむる事とせむる事
七月廿九日某と申物傳へけ侍候南無阿弥陀仏

たすけの心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
の事とせむる事とせむる事とせむる事とせむる事とせむる事とせむる事
るもくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
け格あつてもくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心

まのりくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
ふあつてもくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
たすけの心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
たすけの心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
尾むねよるもくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
かく格別ちかたあり秋はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
と味とほけくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
おろくも味有り科たつても格あつても味とほけくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心
色り花よるも味あつても格あつても味とほけくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心はくしと申したる心

後鳥羽院

上

下より一々も自然の風味をたてよたう一秋も自然乃
 遠年の一秋なり即ち尾花峰より秋とあらはるるを
 秋とまくくりたうよかきくも遠年の一秋なりと
 はまの秋なり一秋の味を西り道の味のはまの秋
 の秋は遠年の一秋なり秋の味を西り道の味のはまの秋
 仕出たる秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 味の秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を

秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を
 秋の味を西り道の味のはまの秋の味を

Handwritten text in the upper right margin of the right page.

二二六

詞ははるばるも... 國十の信... 著人... 吾人... 又... 井... 田... 馬... 何...

何を去して... 何... 著... 吾... 又... 井... 田... 馬... 何...

後...

二二七

石山

三

日守の故中隠く 隠より

後水尾院御製

世伊知の月とていつかの夜は
つる第一とてそのまはかりたるは
書は後まつりふ句とありも
の中ふは句第一とていつかの
いづれとていつかのまはかりたるは
句ふ目とていつかのまはかりたるは
句よき前後うけ合ひその眼を
うよき前後うけ合ひその眼を

とくりへちぐ上句とていつかの
ありとていつかのまはかりたるは

一 夕づく時 ウスライ 暈 カクム うらふ

十一月五日作

東怨権現十七条條ふ和歌ハ綺語たりとていつかの
於へうとていつかのまはかりたるは
一つわりとていつかのまはかりたるは
綺語とていつかのまはかりたるは
のまはかりたるは
綺語とていつかのまはかりたるは

後の石上

三

尾形 一

神道もまたにらまはし御とまへむ人の御心持

格とあはくはもこのひさしとす

あ通海とくちとすもこのひさしとす

らりわし古作の約さきとす

りよよわの御心持とす

初平の通海とくちとす

よの申をりたまへん御心持とす

世にハハの御心持とす

かまの御心持とす

御申とす御心持とす

かまの御心持とす

まの御心持とす

十一月廿七日

ありとす御心持とす

ありとす御心持とす

ありとす御心持とす

ありとす御心持とす

ありとす御心持とす

ありとす御心持とす

ありとす御心持とす

尾形 一

尾形 一

よりいけおまの和年と所 和まののたほふ年時 和年ふ
とていふ一 和まあつて成つたもて日本ハ陰陽和公の
あつたもていふもはあつたもあつたもあつたもあつたも
まゝとていふもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
和公ハ和年の年時第一ふあつたも和公のあつたもあつたも
和年とていふもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
又とていふもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
まゝとていふもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも

和年

作其方教とていふは和公の
わんーやーりま極とていふは和公の
なま^極うらたら中とていふは和公の
もわんーやーりま極とていふは和公の
かくなた極とていふは和公の
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも
あつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたもあつたも

和年

和年

かりとわれとてをまを流かしてそをわすれしをまを
 面かす意味ありあへり或は道に流のまをたしとて
 なるまをまをわ曲きつらまをたしとてまをまを
 よあへりまをまをまをまをまをまをまをまを
 を曲あへりまをまをまをまをまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを
 してまをまをまをまをまをまをまをまを
 合志いし海をまをまをたしとてまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを

たりとわれとてをまを流かしてそをわすれしをまを
 面かす意味ありあへり或は道に流のまをたしとて
 なるまをまをわ曲きつらまをたしとてまをまを
 よあへりまをまをまをまをまをまをまをまを
 を曲あへりまをまをまをまをまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを
 してまをまをまをまをまをまをまをまを
 合志いし海をまをまをたしとてまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを
 ありまを曲あへりまをまをまをまをまをまを

むきだきありぬき生曲小海さる曲即之曲三
わ二天地自然あり又古書およしのあひあ
清く海外昔の事おぼくはあつそひとききし
き方の海からた松さきて古人も昔もまじり
とぬきしきしよまじりあひに回あつしきも
異ありた人と小思とのあつしきもさるる
ゆるり又よ別あり脚小兒の海外位さるる
痛ははるあれさゆの痛ははるあれ痛りや
はるもさるりたるあつ痛きこころあつし
心よりあつしあつしとさるるあつしとさる
る

たつひあつしけんしけんしけんしけんし
痛のなき目あつしとさるるあつしとさる
功ありあつしとさるるあつしとさるる
さるるあつしとさるるあつしとさるる
かろりあつしとさるるあつしとさるる
六月一日間のいほき言信く新正徹子あつし
かろりあつしとさるるあつしとさるる
あつしとさるるあつしとさるるあつしと
さるるあつしとさるるあつしとさるる
たつしとさるるあつしとさるるあつしと
さるるあつしとさるるあつしとさるる

後の上止

三十五

おもしろく見えようのよしとわかれし
らさうなぬらひ

うしろの鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし
うしろの鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし
うしろの鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし

鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし
うしろの鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし
うしろの鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし
うしろの鳥丸のとあらうせむけのうらまへ
おもしろく見えようのよしとわかれし

後の鳥丸

三十一

Handwritten marginalia on the right side of the top page.

三十一

Main handwritten text on the right page, starting with "このお寺に御..."

Main handwritten text on the left page, including the date "九月十日" and "のちをへ"

残の紙止

三十一

棚^の一^つ ^{やま} ^て ^け ^ら ^ぬ ^用 ^お ^の ^く ^ら ^ひ ^ま ^あ ^ふ ^物 ^と ^や

り^ざ ^り ^む ^じ ^り ^た ^づ ^く ^日 ^ウ ^ス ^ラ ^イ ^カ ^ズ ^ク ^傾 ^ら ^う ^ふ

七月別 唐衣^の ^と ^ゆ ^さ ^か ^と ^り ^鹿 ^回 ^ふ ^天 ^女 ^川 ^若 ^石

ふ^か ^も ^し ^う ^ら ^り ^の ^跡 ^は ^鹿 ^は ^く ^と ^{あり}

ふ^あ ^し ^も ^秋 ^の ^う ^ら ^り ^と ^{あり}

五月十一日 先年^の ^信 ^り ^も ^な ^か ^ら ^い ^ら ^し ^二 ^字 ^を ^右 ^と ^い

一字^二 ^夫 ^的 ^中 ^秘 ^事

西^法 ^を ^平 ^一 ^丙 ^申 ^二 ^月 ^二 ^日 ^作 ^号 ^と ^あ ^く ^後 ^の ^心 ^を ^何 ^事

と^あ ^り ^し ^く ^は ^た ^ら ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

何^ら ^に ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し ^と ^あ ^り ^し

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text on the right page, written in a cursive style.

Main body of handwritten text on the left page, continuing the narrative or list.

お徳

大なる此村の秘えのかられよ長をそくのいふとわのやと
らまにわものいめらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

道念院

おの老ぬり来さうはえと子とぶる長成りてお人
けしち忠なりそはあへ孫お續きもれ
又にも仁めりたんと

形千反

けしち忠なりそはあへ孫お續きもれ

様千反

おの老ぬり来さうはえと子とぶる長成りてお人

卯月廿八日此村の秘えのかられよ長をそくのいふとわのやと
らまにわものいめらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とまぬぬおよぬ吉人のま達のつたをいふとわのやと
らまにわものいめらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おの老ぬり来さうはえと子とぶる長成りてお人
けしち忠なりそはあへ孫お續きもれ
又にも仁めりたんと
おの老ぬり来さうはえと子とぶる長成りてお人
けしち忠なりそはあへ孫お續きもれ
又にも仁めりたんと
おの老ぬり来さうはえと子とぶる長成りてお人
けしち忠なりそはあへ孫お續きもれ
又にも仁めりたんと

五ノ節のおは作福茶はかよれた紙は書か礼を
 自ら承るは師の徳前なるものあらはに
 紙の書もあもちやくは紙の中へて今も先世
 かしきまをいふはよれた紙の海もまた古
 物へ紙も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま

つひに紙の程紙のまはくは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま
 かりて今も先世の紙の程紙のまはくは
 かくもゆきまをいふは紙の行へき紙。ま

夫れをいふらまうふき備へおのむく国のもつ火
 廿五のらいつもまねをたあるもの御書申すく
 新編編むらる振もまをたあるもの御書申すく
 よる人のいふ事、法もあつておとす者さうり
 進んで来り或人、このあつてさうり進んで
 死んでさうり、只たておつて進んでさうり人たあ
 る、おとすものあつて、おとすものあつて、
 してさうり、おとすものあつて、
 日下おつて、おとすものあつて、
 入る、おとすものあつて、

武家の義兵、信者の
 信者、おとすものあつて、

叶通よ入る、おとすものあつて、
 よう、おとすものあつて、
 少く、おとすものあつて、
 同、おとすものあつて、
 して、おとすものあつて、
 林、おとすものあつて、
 中、おとすものあつて、
 日、おとすものあつて、
 の、おとすものあつて、
 の、おとすものあつて、
 の、おとすものあつて、

石の印



一巻のしるし

又これ等の秋は何を言わたり山内へいりし

すて秋の夕れ暮は何と只中へいりし

相戸出

玉き

うへは流は天の羽衣をまきて今も霧の神やうへん

流河のうへは流はうへんあつてうへりて夜更にさし

きよりすうを舞いあはれ

磯の浪をのしぬ

